

丸鬚結うたひとが来て

こつそり僕の横顔を

懐しさうにみつめてる

僕が其方をふりむくと

婦人はすぐに眼をそらし

姿もいつか消えて行つた

その白い顔、その眼元

母の姿はしらないが

母のやうにも懐かしく

暫し忘られないでゐた

その年も暮れこの秋に

林檎畑につやつやと

つやつや熱れた林檎の實

籠に抱へた歸り路

夏の祭まつりの夜よに逢あうた
母ははに似に顔かほのひとがある

林檎りんごの蔭かげに見みえる顔かほ

僕ぼくの姿すがたを見みてる顔かほ

たゞ懐なつかしく一いつ散さんに

走はしり寄よりたい程ほどだつた

あれが母ははではないのかと

僕ぼくの心こころはうたがひに

亂みだれ亂みだれてしまつたが

畑はたけの番ばんの爺ぢいさんに

こつそり聞きいて驚おどろいた

いまゝで知しらぬその秘ひ密みつ

母ははは少すこしのわけあつて

僕の生れた翌る年

なくなつて寶家へ引取られ

二度と歸つて來なかつた

四五年経つた後のこと

隣りの島へ嫁いだが

忘れ兼ねては此處へ來て

僕の大きくなつたのを

心ひそかに喜んで

歸つて行くといふ話

あゝそのわけであつたなら

芝居の前で逢うたとき

林檎畑で逢うたとき

何故に黙つてゐたのだら

一眼なりとも母に逢ひ

やさしい胸にすがりたい

一言なりと母に言ひ

やさしい返事を聞きたいと

胸に思ふはそればかり

日夜思ふはそればかり

隣の島にあるからは

尋ねて行つてみたならば

吃度逢はれぬ事はない

なんで逢はずに置かれよか

力をこめて櫓を押せば

青いみ空を月がゆく

月の光りのあるうちに

母在す島へ漕いで行かう

渚の別れ

一の少年

「僕はいよいよ明日の朝

一番列車で別荘を

出発するにきまつたよ

それで君にももう一度

逢つて話して行きたいと
今朝から思つてゐた折だ」

(渚に寄せる夕波が

静かに砂を噛んでゐる)

二の少年

「そろそろ秋が近づいて

昔は涼しくなつたから
君もそのうち歸るとは
かれて思つてゐたものゝ
別れとなればなつかしい
出来ることなら留めたいが

(初秋の夜の空遠く)

星がきらきら光つてゐる)

一の少年

「君と知るよになつてから

この海岸の一夏は

實に楽しいものだった

別れはしたくないけれど

また來年の夏に來る

それまで丈夫で居給へよ」

(別れ兼ねてゐる清造に)

潮がだんだん満ちて来る)

二の少年

「君が歸へれば僕ひとり

淋しい濱に居残つて

眞面目に語る友もない

漁師の家に生れずに

僕もやつぱり君の様な

家に生れて来たかつた」

(うすら冷たい潮風が)

二人の顔を吹いてゆく)

一の少年

「広い世間に生れ来て

何にも歎く事はない
男と生れ君の様な
強い軀を持つてたら
何にも歎く事はない
君の軀が羨ましい」

(二人は波の音を聞き
しばし無言で立つてゐた)

二の少年

「家に着いたら手紙だけ
屹度寄越して呉れ給へ」

一の少年

「君も寄越して呉れ給へ
それではこれで別れるよ」

(二) 人の小さい足跡を
波が寄せては消してゆく

かきつばた

遠くの方で鐘が鳴る
晝の休みの鐘だらう
皆な一緒に庭に出て
何時も楽しく遊ぶのに
私一人が行かれない

病氣の爲に行かれない

青い天鵞絨敷きつめて

紅や黄色の寶石を

散らした様な草原に

白いシャツツツの友達が

バットを振つて男ましく

ベースボールをしてゐやう

紫色の藤棚の

下の日蔭にねころんで

甘い香りに慕ひよる

蜂の羽音を聞きながら

お伽噺や雑誌など

一緒に読んでゐるだらう

機械體操や角力にも
飽きた皆なが裏門の
小川に行つて蛙釣り
岸から足を滑らして
仕立下しの夏服を
黒く汚してゐるだらう
落第生で意地悪く

力自慢な級友も
厭な學課の數學の
黒い眼鏡の先生も
かうして床に寝てゐれば
誰も私になつかしい

明日は學校に行かれると
お醫者のいつたあの言葉

今日で十日になるけれど

軀は少しも治らない

睫毛濡してしらじらと

涙が頬を流れくる

窓を開けば五月晴

池の水際にかきつばた

むらさき色に咲いたけど

もとの丈夫な身になつて

いつから學校にゆけるやら

遠くの方で鐘が鳴る

逃げた小鳥

私はしばらく眼を病んで

醫者に縛帶されたまゝ

ベットの上に寝がされた

今まで開いた雨眼が

急に見えなくなつたので

心細さはひとしほだ

半日経つともう飽きて

縛帶とつてくれといふ

けれども醫者は許さない

「手術しなけりや今頃は

潰れてしまつた雨眼が

また見えるよになるのです

五日か六日の辛抱を

しきれぬことがありますか」

無理に我慢をさせられた

はじめのうちは本などを

読んで貰つてゐたけれど

それも間もなく飽きてきた

ところへ近所のA君が

見舞に來たといひながら

小鳥を籠に入れて來た

「叔父から貰つた珍しい

南の國の小鳥だよ

君にや姿は見えないが

唄ふ聲でも聞き給へ

そら好い聲で鳴くだらう」

言つてゐるうちに窓際で

ピンピロロロ……と鳴いてゐる

何とも言はれぬ澄んだ聲

銀のお皿をたたくよな

暖かい日をあびながら

朝から絶えず鳴いてゐる

その聲聞くと今までの

淋しい心は何處へやら

聞けば聞くほどその鳥の

姿が見たくなつて来た

看護婦などがやつて来て

卵や野菜を奥りながら

「まあ、よく慣れてあることよ

私わたしの手てにとびのつて

赤あかい嘴くちばしで食たべるの」と

面白おもしろさうに睡まぐので

私わたしも床とこから起おき出だして

餌えを與やりたくてたまらない

眼めはだんだんと快よくなつて

二三日ふた経たては縋す帯たいが

とれると醫い者しやがいふものよ

それまで我が慢まんしきれずに

ある朝あさ床とこを抜ぬけ出だして

窓まどのとこまで行いつてみた

鳥とりを見みやうと眼めに巻まいた

縋す帯たいとると朝あさのひが

ばつと烈しく眼にさして
ぐらぐら眼暈がした拍子
片手に持った鳥籠を
手放したからたまらない
小鳥は籠をぬけ出して
遠くの空へ飛んで行った
ベットの中に寝てゐたら

こんな事にはなるまいに
口惜しいことをしたものと
思つたけれど仕方ない

窓に凭れて痛い眼を
手でかくしつゝ考へた
逃して聲を聞かぬより
たとひ姿は見なくても

聲こゑだけ聞きいた方かたがよい

歌うたふものには歌うたはせて
遠とほくで聞きいた方かたがよい

□れがこあ□

大正八年七月廿日印刷
大正八年七月廿三日發行

著者 佐藤 落葉

定 價 五 十 五 錢

發行者 岡 雷 平

東京市麹町區山元町一丁目三番地

印刷者 竹 廣 豊

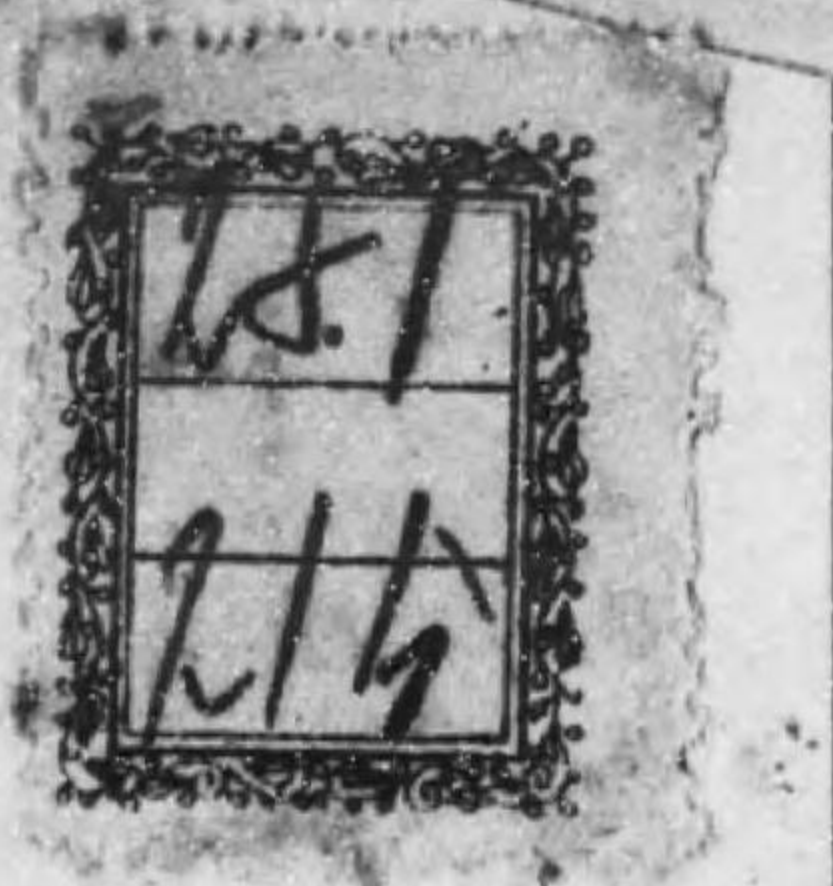
東京市小石川區西江戸川町二十一番地

發行所 新 光 社

東京市麹町區山元町一丁目三番地

電話 九六一三〇番
東京市四三三番〇番

(東京印刷株式會社印刷)



終

